

事業レポート

2014, 5/31 (土) 浜松市福祉交流センター
発行：災害ボランティアコーディネーター養成講座 スタッフ

平成 26 年度 災害ボランティアコーディネーター養成講座 2 日目

平成 26 年 5 月 31 日 (土) 浜松市福祉交流センター (浜松市中区成子町) にて災害ボランティアコーディネーター養成講座 2 日目が開催されました!

【セミナー4 被災とは? I】

～混乱期の支援活動を学ぶ～



講師：NPO 法人はままつ子育てネットワークぴっぴ
原田 博子氏

ぴっぴとは・・・

浜松市より委託を受け、市内の子育て情報サイトの運営などを通じて情報発信の場を提供しています。2006 年から子どもを守る防災に関する事業を始めました。

現在は全国各地でワークショップを実施しており、約 6,000 人の方に体験していただいています。地域とのつながりに重点を置き、「遠くの親戚よりも近くの他人」「災害時に子ども達でも役に立つことがある」という視点から理解を深めてもらっています。

子育てと防災・・・

自身の体験として、子どもが小さいときは防災訓練に参加すること自体が困難で、「防災の情報が得ることができないなあ」と感じたそうです。

子供のいる家庭や介護が必要な人ほど防災に関する情報が必要という視点を持ってほしいと考えています。

東日本大震災での活動

震災から半年後に宮城、新潟、岩手県にてヒアリングを実施しました。福島からの避難者が多いように見受けられました。

また、ホームページやツイッターを活用し、情報の収集・発信が多く行われたことがわかりました。その一方で、支援物資が大量に届き、仮設住宅の倉庫に山積みとなっている現状もありました。ネットで一度情報が流れると、「物資が(ずっと)不足しているんだ」と勘違いされて、送りつけられてしまうということが多いようです。時系列で必要となる支援物資が変動するということが理解される必要があります。

子ども達への影響としては、ビデオやおもちゃをもらい慣れてしまった様子が伺えました。

子育てに関するニーズ

子育てに関するニーズは多くあります。

- 出産や新生児ケアができなくなった。
- 分娩や沐浴ができなくなった。
- 授乳が困難になった。
- 乳幼児向けの物資が入ってこない。
- 離乳食が手に入らない。(介護食も同じ)
- 乳幼児の定期検診や予防接種が途絶えた。
- 発達障がいや医療的支援が必要な子どもに対するケアが不足した。
- 感染症対策が必要 など。

まとめ

被災すると子ども達を取り巻く環境が悪くなります。支援が必要な家庭ほど避難所に行けないなど、ニーズが埋もれてしまいがちです。

子ども達は精神的打撃を受けており、メンタルケアが必要な子どもも多いです。遺児の遺産目当てに引き取る事例もあり、子どもやその親に対するケアを丁寧にしていく事が重要です。

【セミナー5 被災とは？ II】 ～ワークショップ 共有するということ～



講師：災害ボランティアコーディネーター連絡会

クロスロードゲームとは

「クロスロード」(Crossroad)とは、「岐路」、「分かれ道」を指す言葉で、そこから転じて、重要な決断、判断のしどころを意味します。

参加者のみなさんには阪神淡路大震災で実際に起こった事例をもとに、難しい判断を迫られる設問が用意されています。

二者択一の設問に「YES」「NO」で回答し、判断を下すことを通して、防災を「他人事」ではなく「我が事」として考え、同時に相互に意見を交わすことをねらいとしたゲームです。



実際にやってみて

判断に迷う設問が多くあったため、参加者の皆さんで意見が分かれることが多かったようです。

メンバーの意見を聞くうちに意見が変わった人も

いました。「もっと情報を収集してから考える。」「近隣住民の役割をあらかじめ決めておく必要がある。」などの意見もありました。

また、設問に設定されている地域のリーダー、母親などの回答者「立場」によって回答が違いました。「リスクはあるが心情的には手助けをしてあげたい」という声も多くあり、お互いの意見を交換し合いました。



まとめ

このゲームでは、「どちらの回答が正解か」ではなく、「どのような考え方があるのか」を知るために、グループ全員がいろいろな意見を出し合うことが重要です。そのため、多数派の意見が正しいのではなく、少数派の意見の方がなぜそう考えたのかを知る機会となったのではないかと思います。

みなさんが地域へ戻られた際にここで学んだことを他のみなさんに伝えてあげてください。その際には市社協や各区の災害ボランティアコーディネーター連絡会も協力します。



災害時、復旧、復興期のボランティア活動】 ～時間とともに変わっていく活動～



講師：震災がつなぐ全国ネットワーク 松山 文紀氏

講師のプロフィール

阪神淡路大震災の際、神戸市において復旧・復興支援活動を行いました。現地で必ず「まさか自分が被災するとは・・・」という言葉を見聞きします。

一言に「災害」と言ってもいろいろな形があります。まずは“敵”を知り、「今地震が来たらどうするか」と常に意識して減災を心掛けましょう。

災害ボランティアセンターとは

災害発生時のボランティア活動を効率よく推進するための組織です。静岡県地域防災計画では市町村協が運営していくと定められています。

災害ボランティアコーディネーターの主な役割は被災された方のニーズとボランティアをつなげる役割です。

常に被災者（人）が何かを求めるニーズがあって初めて災害ボランティアセンターができ、その機能が発揮されます。

災害ボランティアセンターの機能はハローワークに似ていると思います。

- ①被災者（求人をしている職場）がニーズ（求人票）を提出する。
- ②活動（仕事）の条件等とボランティア（求職者）を結びつける。

企業の求人情報と違うのは、「〇月〇日、〇時～〇

時まで、何人必要」などの具体的な情報が出せない人がほとんどです。

具体的に表現できない人、表現できないニーズが災害ボランティアセンターに上がってこないという点に支援を差し伸べる必要があると思います。コーディネーターは困っている人達の“通訳係”だと思ってください。

変わっていくニーズ

避難所では何に困っているかが見えやすい。その後、仮設住宅に転居すると、ニーズは一律でなくなります。そのため、何に困っているかが分かりにくくなっていきます。復興住宅に入ってしまうと更に外から見えづらくなってしまいます。

グループワーク

緊急期・復旧期・復興期のそれぞれで、①何に困っているのかと②何故困っているのかを付箋紙に書き出し、グループでまとめました。



ワークを通じて新しいことに気づくことができましたでしょうか。“気づき”がないと、関わる事ができません。

○避難所ではこんなことが考えられます。

- ・食事が若者向けのどを通らない。
- ・アレルギーに対する理解が得られない。
- ・菓子パンなど同じものが続く、選べない。
- ・男女とも着替えの場所がない。
- ・女性への配慮がない。
- ・やることがない。
- ・誰も悪くないのに妬みが出る。

○復旧・復興期ではこんなことが考えられます。

- ・自分の生活だけが変わらず、世間から取り残された感じがする。
- ・忘れられていることが辛い。
- ・生きていく希望がなく、やる気が起きない。

時期によって必要な支援は変化し、時間の経過とともに個別化、具体化、潜在化していきます。単純に物資や支援を与え続けることは、支援のもらい慣れにつながり、「自立」という視点に立った場合、被災者にプラスとなっているかという議論があります。災害ボランティアの根本はニーズありきです。「ボランティア活動する人のための活動」にならないようにする必要があります。

また、ボランティアでは解決できない課題も多く持ち込まれます。解決できないかもしれませんが、“被災者と一緒に悩む”ということはできます。被災者一人ひとりが今後の人生を思い描けるように支援することが重要です。

